

Boston Research Notes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6951

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ボストン研調メモ

Boston Research Notes

松村茂樹

はじめに

筆者は、2019年9月3日～11日、米国ボストンへ研調に赴いた。主な目的は、ボストン美術館所蔵漢籍の調査で、これは2015年4月～2016年3月、ボストン大学客員研究員としてボストンに滞在し、同美術館で行った岡倉天心（1862-1913）および長尾雨山（1864-1942）の中国関連事業に関する資料調査の補足調査である。今回も、前回同様、ボストン美術館中国美術部長・Nancy Berliner氏のご理解とご助力を得て、順調に資料調査ができた。この成果は、拙稿「ボストン美術館所蔵岡倉天心旧蔵漢籍について」^[注1]に盛り込んだので、ここでは省略する。

今回、上記資料調査以外に、いくつか関連研調を行った。本稿は、その記録であり、メモと題する所以である。以後の研究において、これらを役立てたいと考えている。

呉昌碩「与古為徒」扁額の組成



呉昌碩「与古為徒」扁額

ボストン美術館に常設展示されている呉昌碩「与古為徒」扁額は、「中国最後の文人」と称せられる呉昌碩（1842-1927）が西洋の美術館に与えた唯一の作品として知られている。この扁額は、1912年の作で、従来、当時同美術館中国・日本美術部長であった岡倉天心が上海にいた呉昌碩に依頼したものとされて来た。だが、筆者は、この年、岡倉より同美術館鑑査委員を委嘱された当時上海在住の長尾雨山が、その記念として、隣人として極めて親しく交わっていた呉昌碩にこれを書いてもらい、木版黒漆螺鈿象嵌の扁額に仕立てて同美術館に贈ったと考えた。そして、前回調査の際、これをほぼ論証できる資料を見つけていただき、その成果を拙稿「近代のボストン美術館に見る日中米文化交流について—岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献—」^[注2]にまとめた。

さて、この扁額は、『岡倉天心とボストン美術館 図録』「作品解説 / 呉昌碩 與古為徒」^[注3]によると、縦69.1cm、横188.6cm、厚7.0cmで、解説文中には、

この作品の彫版、象嵌、塗漆が上海で行われたのか、東京であったのかはいまだに不明である。（中略）

この書は木版に刻版した後、黒の漆が塗られている。四文字の刻印はさらに螺鈿で象嵌され、草書体の長い銘文はさらに金泥されている。この上海の書家は3個の印すべての仕上げに朱色を用いた。

とある。



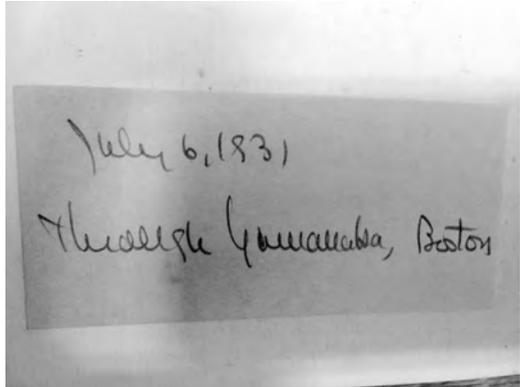
真下から見た「与古為徒」扁額

今回のボストン研調では、ボストン美術館に掲げられているこの扁額を、今一度、詳細に観察してみた。と言っても、かなり高所に掲げられているため、間近で見るとは叶わないので、真下から見たところ、光の反射の加減で、この扁額に横線が入っているのがわかった。つまり、横長の木材をいくつか（6本のように見える）繋ぎ合わせ、両端の裏面に板を当て、木釘で止め、その上から黒漆を塗っているのだ。このような方法は、中国でよく行われるので、この扁額も中国で制作された可能性が高いが、今のところ確証はない。今後の研究に俟ちたい。

山中商会ボストン支店址



16085 考古図 貼付シール



47630 殷墟書契詩問編 添付メモ

前回調査の主な目的が、ボストン美術館所蔵漢籍の調査にあったことは前述の通りである。その際、漢籍に貼付されたシールや添付されたメモにより、山中商会より同美術館に入ったことがわかるものがあった。以下に列挙しておく（冒頭の番号は漢籍にスタンプされた収蔵番号）。

16085 考古図 NOV 15 1915 GIFT OF Yamanaka & Co. New York. 1915

16090 博古図録 自第十一卷至第二十卷 王黼 NOV 16 1915 GIFT OF Yamanaka & Co. New York. 1915.

16096 博古図録 自第二十一卷至第三十卷 王黼 NOV 16 1915 GIFT OF Yamanaka & Co. New York. 1915.

- 16818 博古図録 附古玉図 自第一卷至第十卷 王黼 DEC 7 1916 GIFT OF Yamanaka & Co. New York.
- 47630 殷墟書契詩問編 羅振玉 July 6 1931 Through Yamanaka, Boston
- 47645 古兵符考略殘稿 羅振玉 July 6 1931 Through Yamanaka, Boston
- 47646 歴代符牌後録 羅振玉 東山学社校刊書籍記 July 6 1931 Through Yamanaka, Boston
- 70449 石刻名彙 第一編 誌銘類 附墓埶地券 July 6 1931 Through Yamanaka, Boston

山中商会は、第二次世界大戦前において世界的に有名であった日本の東洋美術商である。山中家の全面的協力を得て執筆された、朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商』（2011.3.25 新潮社）によると、1894年11月、山中家から送り出された山中定次郎、山中繁次郎は、ニューヨーク西27丁目に店舗を構え、1898年秋、一等地の5番街に進出した。また、1897年にはビゲロー、モース、フェノロサ等顧客の住むボストンに進出し、1898年11月頃にボイルストン・ストリート272番地に店舗を構え、1905年に同324番地に、1914年3月頃に同456番地に移り、そして1935年に同424番地に移ったという。

ボストン美術館には、この山中商会が関わった収蔵品が少なからずあり、『Museum of fine arts, Boston』「Collections Search」^[注4]で「Yamanaka & Co.」をキーワードに検索したところ、446件がヒットし、「Yamanaka & Co., Boston」をキーワードにすると、95件がヒットした^[注5]。これらの中には、絵画、浮世絵が多く、次いで日中の衣装や生地も多いが、仏像、陶磁器、青銅器等もあり、山中商会がボストン美術館のコレクション形成に大きな役割を果たしていたことがわかる。また、上記の漢籍（「Collections Search」では検索できない）も山中商会が関わっており、その取り扱いが広範囲に涉っていたことが窺える。

さて、今回、ボイルストン・ストリート424番地にあった山中商店ボストン支店の址地を訪ねて見ようと思い立ち、ボストン近郊在住の新里郁夫氏にお願いしたところ、あらかじめMassachusetts Historical Societyで、当時の資料をご確認くださいとされた上で、奥様の輝美さんと共に、筆者をお連れくださいました。そこは、「Berkeley Building」の一面で、当時の写真が故山中

定次郎翁伝編纂会『山中定次郎伝』（1939.3.25 株式会社山中商会内故山中定次郎翁伝編纂会）に見えるが、今も外観はほぼそのまま残されている。この「Berkeley Building」は、ボイルストン・ストリートとパークリー・ストリートが交差する地点の東南角にあり、Stephen Codman と Constant-Désiré Despradelle の設計によって、1905年に完成した名建築である^{〔注6〕}。ここに店舗を構えたことは、山中商会の誇りとなっていたはずだ。



「Berkeley Building」
（写真中のキャップを被っている人物
は新里氏、以下同）

山中商会園芸部門址

前出朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商』に、1899年4月20-22日に、ニューヨークのフィフス・アベニュー・オークションルームズで行われた競売「不思議かつ見事に育成された日本の花と樹木の素晴らしいコレクション (A Magnificent Collection of Japanese Floral and Arboreal Plants, Curiously and Wonderfully Trained)」カタログの序文が紹介されており、その中に以下のような一節が見える。

日本の大阪にある有名な山中商会は、日本の美術品の大規模で幅広いビジネスと関連して、大阪近郊に広大な庭園を経営し、これまで長年にわたって、最高級の非常に珍しい日本の植物を内外の業者に提供してまいりました。

約三年前、山中のボストン店はドーチェスターの一四六と二三〇—二三四番地に園芸部門を開き、ここに上記の大阪の庭園からすべて直輸入した、見事に育成された日本の花や樹木の素晴らしいコレクションを集めました。

この地点にも行って見たく、前出の新里氏をお願いしたところ、事前に場所を確認の上で連れて行ってくださった。ドーチェスター 146 番地の住所表記は見つからなかったが、230 番地は見つかり、この一帯が山中商会園芸部門址である。



ドーチェスター 230 番地 山中商会園芸部門址

同書は、前出『山中定次郎伝』により、この園芸部門はボストンの社宅の地所の一部であったこと、また、当時米国では、盆栽や日本の植木が好評を博しており、山中商会がこの需要に応じていたことを指摘している。

新里氏は、今もボストンで盆栽や日本の植木が重んじられている事例として、ハーバード大学アーノルド植物園にお連れくださった。そこには、「BONSAI GATE」(残念ながら開園時間外で入れなかった)があり、日本原産の植物も多くあった。



ハーバード大学アーノルド植物園

岡倉とガードナー夫人

ボストンにおける山中商会の重要な顧客の一人がイザベラ・スチュワート・ガードナー (1840-1924) であった。ボストンの富豪・ジョン・L・ガードナーと結婚し、1891年に父の他界により巨額の遺産を相続した後、美術品蒐集を始め、その邸宅を美術館として開放した。それが現在のイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館になっている。

前出朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商』によると、ガードナー夫人と山中商会の最初の接点は盆栽にあったと

のことで、おそらくは上記の山中商会園芸部門に行ったこともあったのであろう。また、1902年5月に山中ポストン店からブロンズ製の中国仏像6点を買ひ、1914年に親しくしていた岡倉天心が亡くなると、地下スペースに「チャイニーズ・ルーム」を設け、山中から購入した中国仏像と共に、岡倉から贈られた茶道具などを展示し、岡倉を偲んだという。

1971年、「チャイニーズ・ルーム」の展示品の大部分が売却され、この部屋も非公開になっているが、部屋の前には解説パネルが設置され、そこには1961年当時の内部がわかる写真がある。

さて、岡倉とガードナー夫人と一緒に写っている有名な写真^[注7]があるが、これは1910年10月6日、ボストンの北東に位置するマサチューセッツ州グロスターにある「Beauport, the Sleeper-McCann House」で撮られたものという。



イザベラ・スチュワート・ガードナー美術館「チャイニーズ・ルーム」



「Beauport, the Sleeper-McCann House」

前出の新里氏ご夫妻が、ここにも連れて行ってくださった。残念ながら「Beauport, the Sleeper-McCann House」は休館日で入ることはできなかったが、美しい自然に囲まれた高級リゾート地の環境を確認することができた。

小川一真の修行店

筆者は現在、前出の呉昌碩と長尾雨山および、長尾が形成した「書画文墨趣味ネットワーク」の研究に取り組んでいる。長尾は、「中国最後の文人」と称せられる呉昌碩に上海で隣人として交流し、帰国後、上海で参加した詩会と同趣の寿蘇会・赤壁会を開いて、そこに集った日本人士を繋ぎ、「書画文墨趣味ネットワーク」を形成したのである。この「書画文墨趣味ネットワーク」の充実に大きく貢献したのが、博文堂という出版社と小林写真製版所という印刷業者であった。

博文堂主人の原田大観（1855-1938）は、首相をつとめた犬養木堂（1855-1932）の政治活動を物心両面から支えた後援者であったが、官憲による弾圧で、東京日本橋にあった博文堂を大阪に移し、書画碑帖など美術出版に限定した。博文堂は、当時最新のコロタイプ印刷により、高精度の書画図録刊行や碑帖複印を行い、書画文墨人士の需要に応えた。この印刷を一手に引き受けたのが、原田の実弟（三弟）・小林忠治郎（1869-1951）が経営する小林写真製版所であった。小林の孫である小林大二氏が、「技術の継承発展－写真印刷から超長尺プリント基板へ」^[注8]の中で、小林写真製版所の業績について、以下のように述べている。

ちょうどその頃、中国の清朝が崩壊し、新しく中華民国が成立すると、混乱を避けて多くの文化人が日本へ亡命してきました。多くの学者たちが京都に身を寄せ、京都大学の著名な東洋学者と研究を行います。当時新しく敦煌などで発見された文化財を早く世界に紹介しようとしていましたが、その印刷出版をコロタイプで行うと決まり忠治郎に任されることになったのです。中国の金石学者、羅振玉（らしんぎょく）は忠治郎のコロタイプによる古文書の複製を「神業だ！」と激賞したと言われています。その出版物は現在も京都大学文学部東洋史料に多数保存されています。

このように、小林写真製版所は、1911年から1919年まで、日本に亡命し、京都に寓居した金石学者にして書画を善くした羅振玉（1866-1940）が関係した図録類の印刷も一手に引き受け、その精度の高さを賞賛された。前出のボストン美術館蔵の羅振玉刊行漢籍印刷も小林の手になると思われる。

小林は、このような高度な技術をボストンで学んだ。同文引用を続けよう。

祖父は、明治33年（1900年）米国東洋艦隊の水兵となって横浜から皿洗いなどしながら密航、写真印刷に対する志を、写真に興味を持っていた艦長が受け止め、寄港先のボストンを調べて、写真技術をハスティング写真館で、印刷技術をアルバートタイプ社で学べる様に手配してもらい、紹介状まで書いてもらって留学したそうです。

少量写真印刷に適した当時の先端技術であったコロタイプ印刷は企業秘密の技術であり、その習得には多くの困難がありました。仕事が終わってからも、細かなノウハウを聞き出すために、技術者が集まる酒場に何度も足を運んだそうです。

苦勞の末、新しい技術を身につけ明治36年に無事帰国しました。

ここに、小林がボストンのハスティング写真館、アルバートタイプ社で学んだことが記されているが、実は、これよりも先の1883年から翌年にかけて小林の実兄（次兄）・小川一真（1860-1929）がボストンに行き、この二箇所等で修行をしているのである^[注9]。

小川一真は、写真家、写真出版者として極めて有名な人物で、以前の千円紙幣に用いられた夏目漱石の肖像写真もその手になる。小林大二氏は小川のことには触れていないが、小林は兄の小川の修行店を訪ね、技術を学んだのであろう。

小川の修行店の址地も新里氏がお連れくださった。ハスティング写真館は、正式名を「Ritz & Hastings photography studio」といい、ボストンの templeプレイス 58号にあったという。写真に見える「52」とあるビルの2階部分に当たる。ここは、ダウントウンのほぼ中心部に位置し、まさしくボストンの一等地にある。



「Ritz & Hastings photography studio」 址

今回、アルバートタイプ社の址地はわからなかったが、小川がカーボン印画紙と乾板製造法を学んだエドワード・L・アレンとフランク・ローエルの経営になるアレン・ローエル商会の址地を新里氏をご確認ください、お連れくださった。アレン・ローエル商会は、正式名を「Allen and Rowell photographers」といい、ボストンのウインター・ストリート 25 番地にあった。ここは先ほどのテンプルプレイスのすぐ近くで、やはりダウンタウンの一等地である。



「Allen and Rowell photographers」 址

小川や小林は、このボストンの中心部で、当時最新の写真術や印刷術を学び、日本に伝えたのである。小林のコロタイプ印刷が羅振玉に賞賛されたことは前述の通りであるが、実は、小川も、日本で最初に刊行された呉昌碩の図録である田中慶太郎編『昌碩画存』（1912.12.15 田中慶太郎）の印刷を担当し、呉昌碩に絶賛された。呉昌碩は、送られて来たこの自らの図録を見て、友人の沈石友宛尺牘（栗原蘆水編集発行『呉昌碩尺牘集』2007.9.26 所収）の中で、以下のように述べているのである。

日本人去歳索画大者四十餘紙、現照出一本。生動欲活、絶技動人。

〔日本人が昨年画を大量に四十餘紙も依頼し、今一冊の写真図録にしました。生き生きとしており、絶技に感動しています。〕

このように、小川や小林がボストンで学んで来た技術が、書画図録類に活かされ、「書画文墨趣味ネットワーク」に連なる人々に当時最新の中国文墨趣味を伝え、その充実に大きく貢献したのである。

おわりに

今回取り上げた、岡倉天心、長尾雨山、呉昌碩、山中商会、ガードナー夫人、小林忠治郎、小川一真は、ボストンという同心円上であって日中の文化を共有した存在である。これらの存在が繋がることで、新たな文化が花開いた。

ボストンにあるこれらの遺跡を訪ねることは、その原点を確認することであり、次の研究につながるように思う。

今回、周到な事前調査の上、ご案内をくださった新里郁夫氏、輝美さんご夫妻に重ねて感謝申し上げ、結びとしたい。

[注1] 拙稿「ボストン美術館所蔵岡倉天心旧蔵漢籍について」（『人間生活文化研究』NO.30 2020.2.10 大妻女子大学人間生活文化研究所）

[注2] 拙稿「近代のボストン美術館に見る日中米文化交流について—岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献—」（『人間生活文化研究』NO.27 2017.9.11 大妻女子大学人間生活文化研究所）

[注3] 名古屋ボストン美術館編『岡倉天心とボストン美術館 図録』（1999.10.23 名古屋ボストン美術館）所収

- [注4] 『Museum of fine arts, Boston』 「Collections Search」<https://collections.mfa.org/collections>
- [注5] 2020年1月5日時点
- [注6] 『Lost New England』 「Berkeley Building, Boston」 November 7, 2015 by Derek Strahan 2020/01/06 (プリントアウトの日付、以下同)
- [注7] Victoria Weston, "East meets West : Isabella Stewart Gardner and Okakura Kakuzō : [exhibition] December 10, 1992 to April 18, 1993" Isabella Stewart Gardner Museum, Jan 1, 1992 所収
- [注8] 小林大二 「技術の継承発展 - 写真印刷から超長尺プリント基板へ -」 『あかね』 40号 2002.11.1 京都府立洛北高校同窓会 <http://www5f.biglobe.ne.jp/~kfrkd/gallery/akanemokuji/akanemokuji%2040gou/akane40mokuji.htm> 2020/01/07
- [注9] 小澤清 『写真界の先覚 - 小川一真の生涯 -』 (1994.3.20 日本図書刊行会) 参照

本研究は JSPS 科研費 JP17K02648 の助成を受けたものです。